

氏 名 岡本 貴久子

学位(専攻分野) 博士(学術)

学位記番号 総研大甲第 1646 号

学位授与の日付 平成26年3月20日

学位授与の要件 文化科学研究科 国際日本研究専攻
学位規則第6条第1項該当

学位論文題目 「記念植樹」と近代日本
— 林学者本多静六の思想と事績を手掛かりに —

論文審査委員 主 査 教授 末木 文美士
教授 白幡 洋三郎
教授 稲賀 繁美
教授 岡田 真美子 兵庫県立大学
主任研究員 今泉 宜子

明治神宮国際神道文化研究所

論文内容の要旨
Summary of thesis contents

本研究は、「記念に樹を植える」という活動を近代日本社会の発展の中に位置づけ、記念植樹を推奨した林学者本多静六の視点を通してその行為の根底にある自然観を考究しようとするものである。何故記念植樹か。実は近代国家が形成されるプロセスにおいて、数多くの記念碑や記念像が建立される傍らで、今日、公私を問わず一般的となった記念植樹もまた時の政府や林学者によって国家事業の一環として推進されていたという史実があり、加えて記念植樹を一般に広める為に逐一ニュースとしていた報道機関の存在から、記念植樹も近代化の一牽引役として作用していたのではないかと推測され得るからである。

本研究の論点は第一に植樹という活動にみる「実践性」と「儀式性」の考察にある。「実践性」とは国づくりや山づくりに係る殖産性や風致性であり、「儀式性」とは記念碑性を意味する。植樹に関する研究については、実学の範囲では工学や農学における緑化政策としての側面から論ずるものや、人文学では就中戦前の政治思想的な側面を指摘するものがある。しかし本研究は国民国家形成期に推進された記念植樹という行為の中に「実践性」と「儀式性」という関係を見て取り、それが戦前戦後という近代社会の発展過程において如何に構築され、どのように機能していたかを検証するものである。第二の論点は東京帝国大学教授本多静六の再評価にある。本多を対象とする研究については、造林学や造園学の中に位置づけられるか、或いは経済学博士の肩書から一般向ビジネス書等で取上げられることが通例であった。しかし近代日本において国家的行事に発展する記念植樹という文化的な行為について、本多が何故にこれを推奨したかという根本的な問いから議論されることは稀であった。そこで本研究では本多の人物像に主眼を置き、その思想の根源を探るべく本多の生い立ちから教育環境を辿り、本多の説く記念植樹の理念を抽出するとともに、時代毎の社会的背景と照合しながらその方法論の支柱にあると見られる自然観を導き出すことを試みる。

本文は大きく分けて三つの部分からなる。第一部ではまず記念植樹を「念じて樹を植える行為」と定義した上で、農商務省山林局や本多が執筆したテキストから記念植樹の三形態（記念樹・記念並木・記念林）を概観し、記念植樹に関する報道記事から同時代社会における記念植樹の位置づけを分析したのち、近代国家の形成と記念物の関係について論及する（第一章）。次に記念植樹の由来を紐解く目的で古代の神話や和歌、山の信仰や杣人の風習から植樹に関する諸相を振り返り、古来の植樹や植林における「儀式性」と「実践性」について検討した。この手続きにより何か特別なことを機縁として、「念じて植える」という行為が古くより続く文化であることが明らかとなった（第二章）。

第二部では本多の人物像とその思想の源流について考える。まず本多の歩みと主な事績の概略を述べ（第一章）、彼の思想形成を分析する為に幼年から学生時代に享受した教育に注目する。前者では本多に関する研究でもそれまで本格的に取上げられることの少なかった生家折原家に纏わる富士山信仰「不二道」に焦点を当てる。父を失った静六少年を教導した祖父折原友右衛門は、実は神道国教化の時流に対峙した人物であるということは意外に知られていない。ここでは特に不二道に献身した祖父の人物像や小谷三志の説く実践道

(別紙様式 2)
(Separate Form 2)

徳や自然思想に触れ、本多の思想形成に与えたであろう諸影響について考察した(第二章)。次いで東京山林学校並びに国家経済学としての林学を学んだドイツ留学時代を挙げ、当時の林政と林学の関係を検討するとともに本多の西洋思想の受容と展開について言及した(第三章)。本多の「人となり」を踏まえた所で、実際に本多が勧奨した記念植樹の功德と方法論に着目する。山の信仰を身に付けた本多の説く記念植樹とは、老樹名木を手本に子々孫々と「いのち」を繁栄させるが如く「生きたる記念碑」を植えることであり、樹を愛する「愛樹心」を礎に、一人一本の植栽が森をつくり個人の徳が社会の徳になるという功利的内容を有するが、その理念と方法論が宗教者を含め同時代社会に広く普及していたことが確認された(第四章)。以上から近代文明の導入に積極的だった本多が推奨した記念植樹という行為は、必ずしも西洋志向、近代科学主義に偏るものではなく、前近代的な思想と形態が融和した所に行なわれる活動であることが判明した。

そして第三部では『記念植樹』の近代日本」と題して、近代日本社会における記念植樹の展開について論述する。具体的には明治中盤から昭和戦中期にかけて主に本多が関与した記念事業を事例に、本多の記念植樹に係る理念と方法論の発展過程を検討する。対象としては年代順に学校樹栽事業(第一章)、御聖徳・御大典記念事業(第二章)、第一次大戦終了期の平和記念事業(第三章)、帝都復興に係る都市美運動(第四章)、昭和戦前期から戦中期の皇紀二千六百年記念事業や大多摩川愛櫻会の事業等(第五章)を取り上げ、本多の言説を拠所にその活動の根幹にあると見られる自然観について考察する。

その変遷を辿ると、明治中期に牧野文部次官が導入した学校樹栽事業は学校基本財産構築という殖産が目的であったが、本多は従来の労働を主とする植林に「修学の記念」やアルピニズム等、レクリエーションの要素を加え、楽しみを主とする持続可能な方法論を説いた。御聖徳記念の明治神宮の森づくりでは葬場殿址の一本の記念樹から記念行道樹の植栽、御大典記念植林による街づくりを伴う実践的な植樹活動が奨励されたが、同事業において本多が記念として植え付けたのが不二道の奉仕の記憶であった。それは不二道孝心講の「折原静六」として献木を行なった所に顕現していた。第一次大戦終了に伴う平和の実現を祈念する平和記念植樹では、平和博に出品された帝国森林会の「ご神木」をはじめとして、そこには「いのち」を寿ぐ思想が見られた。続く帝都復興に係る都市美運動においても、犠牲者を慰霊する祈りの植樹式と都市緑化という実践事業が併せて促進される道筋が解明された。そして昭和戦中期の皇紀二千六百年記念では国民の赤誠に基づく献木式と共に、「一億記念樹」として国民総動員の実践的植樹事業が推進され、戦争末期には防空、迷彩の緑地化政策に並行して忠魂の記念樹が捧げられる様子が見て取れた。

総じて戦前、戦中を通して展開した記念植樹という活動は、記念事業のテーマや目的に合わせて、儀式としての記念樹植栽式と、実践としての記念並木や記念林の植林という形態が、単独で或いは複合して実施されるものであった。記念植樹の理念と方法論は、各時代社会の環境に樹木を根付かせることを第一義として漸次研究が重ねられてきたのである。戦後社会では「荒れた国土に緑の晴れ着」を着せんとばかりに記念植樹は継続されるのだが、その活動の根幹に常に備わっていたのが山や樹木に対する尊崇の念であった。即ち「愛樹心」という自然物の「いのち」を敬い、その繁栄を願う自然観が支えとなっていたからこそ、記念植樹という行為に真価が認められ、日本の一つの文化と呼ぶに相応しいまでに

(別紙様式 2)
(Separate Form 2)

発展し、今に継承されていると考えられるのである。

記念植樹は、今日でもしばしば行われて、親しまれている行事であるが、歴史的展開やその意味を論じた本格的な研究は意外にも少ない。文化史的な意味を持ちながらも、他方で植樹、植林ということは、林学的な面があるため、学際的な性格を持っていて、既存の学問領域の中では扱いにくいということが、一つの理由であっただろう。

本論文は明治から昭和前期のいわゆる戦前を時代的対象として、主に公式の場面で実施された「記念植樹」、すなわち「記念に樹を植える」という行為を近代日本の発展過程の中に位置づけて歴史的に展望し、さらにその根底にある自然観とそれが行われた意図を解明することを目的としている。石碑などと異なり、生命を持った樹を植えるという行為には、環境問題、生命観の問題などが密接に絡み、その思想的背景を無視することができない。そこで、本論文では、記念植樹を中心的に推進した東京帝国大学教授本多静六の事績に焦点を当て、その思想と事績の解明という観点から記念植樹の問題に迫ろうとしている。本多は、日本における林学の確立者であり、日本各地の多数の近代的庭園の設計者として知られているが、一般には変わり者の実学者という面から注目されたことはあっても、林学分野での先駆者としての位置づけを越えた文化史的研究は、これまでなかった。

本論文は全3部に序章と終章からなる。序章で研究の目的や研究史について述べた後、第1部では、近代における記念植樹とは何かについて、その三形態（記念樹・記念並木・記念林）を挙げるとともに、このような近代的な営みの思想的な源泉を求めて、古代以来の文学や神話を含め、日本の伝統文化の面から検討する。第2部では、記念植樹を推進した本多静六に関して、その伝記的事実から思想的背景を検討する。まず、本多の生家が富士信仰の流れを汲む不二道孝心講の熱心な信仰を持ち、本多自身も関わっていた事実から、その歴史と思想を詳しく検討し、その自然観が本多に影響を与えていた可能性を指摘する。また、ドイツ留学で学んだ林学が、どのような影響を与えたかを検討する。第3部は本論文でももっとも長く、近代日本における記念植樹の歴史を、本多との関係から5段階に分けて論ずる。すなわち、学校教育の中の記念植樹、御聖徳記念の明治神宮の森の形成、第一次大戦後の帝国森林会の平和記念植樹、大震災後の帝都復興と都市美形成、戦争中の大記念植樹である。これにはいずれも本多が関係しており、近代日本国家の歴史的展開と密接に絡みながら、本多の記念植樹の理念が社会事業として展開していくという性質を持っていた。以上の論述を踏まえて、終章では戦後の状況に触れながら、「いのち」を植えるという記念植樹の特性に改めて注目して、全体をまとめている。

造園などの農学関係ではすでにかかなりの研究の蓄積があるが、近代国家確立の中での記念植樹という問題に焦点を当てた研究はなく、本論文は新しい領域を切り開くものと言える。また、記念植樹の推進者としての本多静六という人物に注目し、日本の近代文化史を見直す研究となっている。このように、本論文は従来未開拓の領域に踏み込んで、大きな成果を挙げている。膨大な資料を精力的に収集読破し、今後のこの方面の研究の基礎を築くものということができる。

さらに、一見すると近代的な庭園や植樹の移入者と見られる本多に、不二道を通して土着的・伝統的な思想が流れ込んでいることを明らかにしたことも大きな成果である。この

(Separate Form 3)

ことは、本多個人の問題に留まらず、日本の近代全体に関して単に欧米文化の輸入という観点からのみならず、伝統文化・思想の継承と変容という観点からも見直す必要があるという、大きな方向性を示すものでもある。国家政策に沿った活動をしているように見える本多に、不二道孝心講の反骨精神が生きているのではないかという指摘も注目され、実際に多摩川堤の護岸工事などで内務省当局と衝突した事例なども紹介している。

ただ、本論文は、収集した資料が膨大であるために、その取扱いに際してやや未整理な点が残し、一次資料と周辺状況の突き合わせに多少の検討すべき余地が残されているように思われる。

このような問題点はあるものの、記念植樹という問題を本多静六という指導者の思想や活動と関連させながら、日本の近代史の中に位置づけ、日本の近代そのものを問い直す大きな成果を挙げている。また敗戦後の記念植樹事業と林業政策との乖離にまで踏み込んで、本多静六の知的遺産を将来に生かす可能性をも示している。このような点で本論文は特筆されるものであり、審査委員全員一致して、博士（学術）の学位を授与するに値すると判断した。